

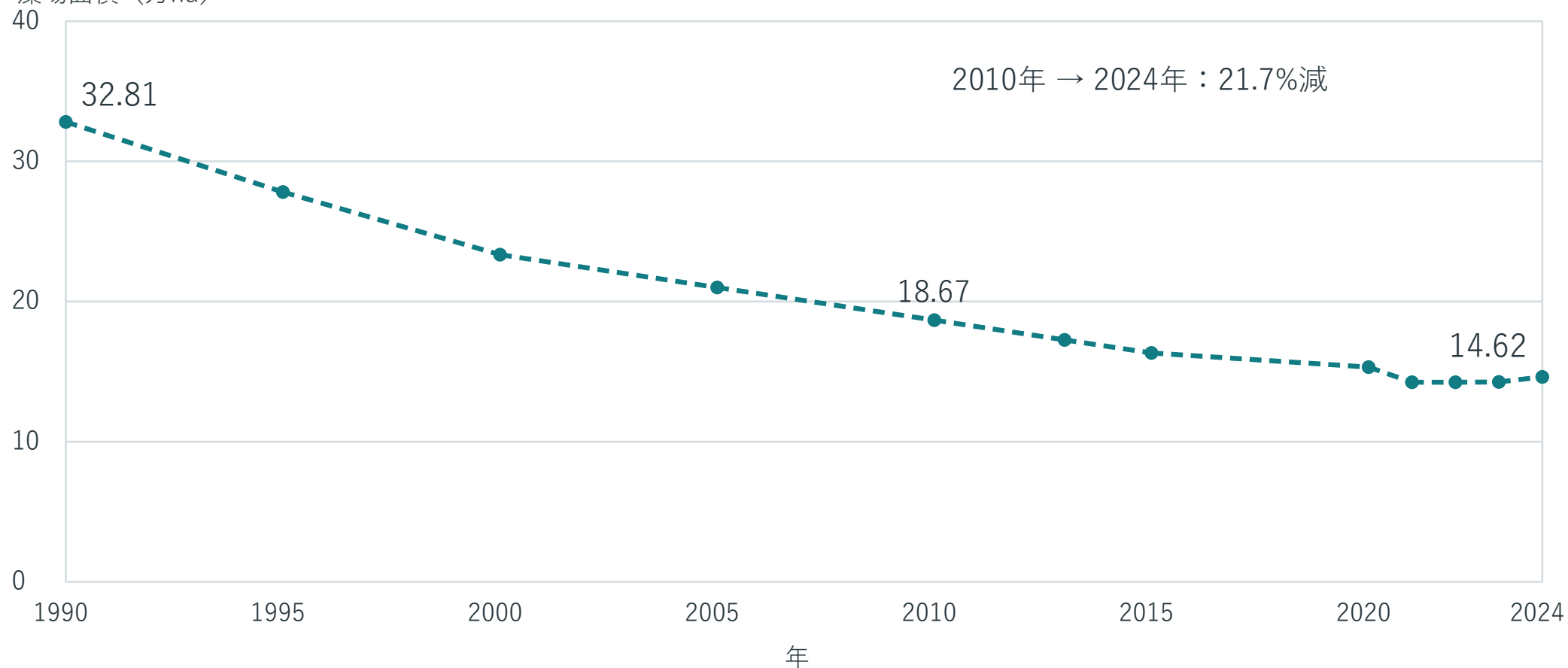
里海活動の現状と期待すること

NPO海辺づくり研究会 監事
NPO大阪湾沿岸域環境創造研究センター 専務理事
岩井克巳

日本沿岸の藻場面積の推移

全国・海草と海藻の合計 | 1990-2024年 | 推計値

藻場面積（万ha）



点：出典表の掲載年 破線：掲載値間の接続（毎年の実測値ではありません）

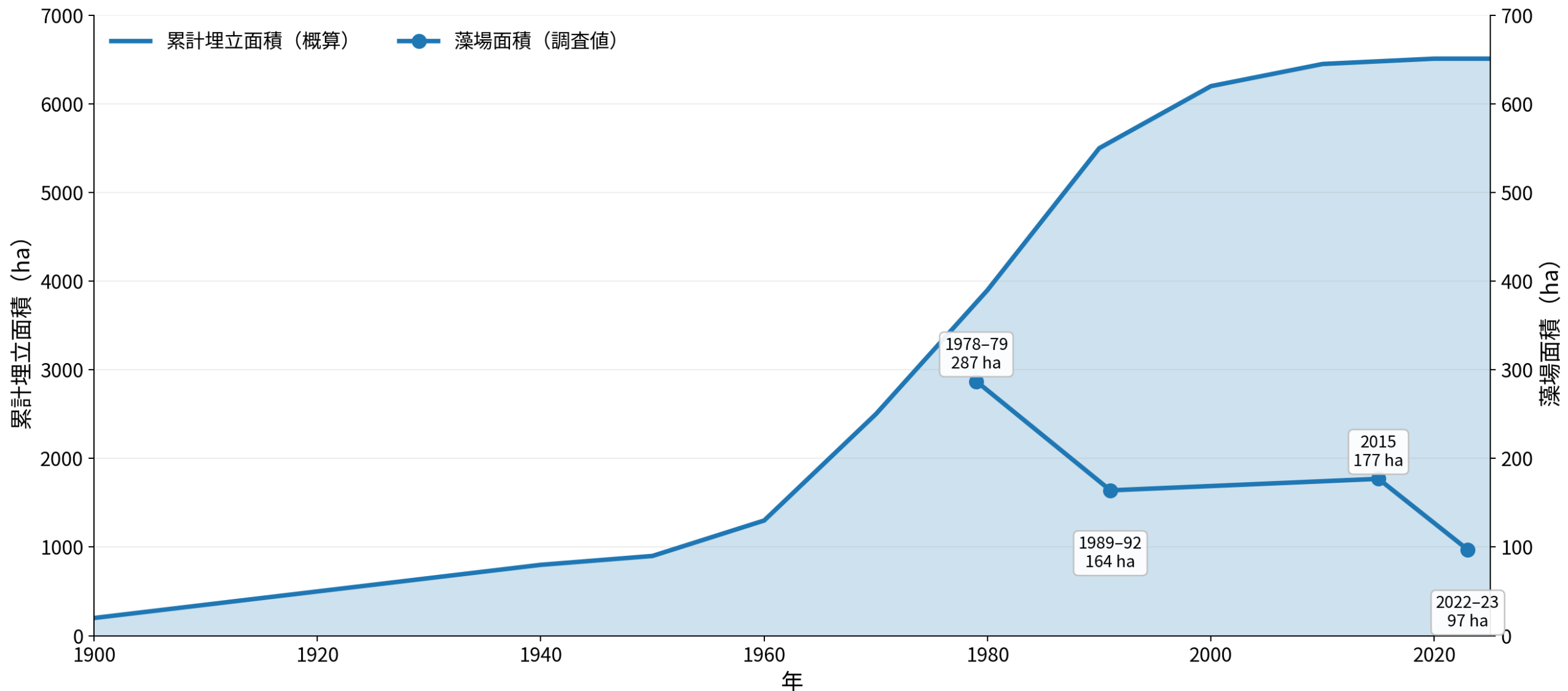
注：過去の調査・補間・藻場分布モデルを組み合わせた推計。

出典：環境省「日本国温室効果ガスインベントリ2026」第6章 表6-52（p.6-57）

<https://www.env.go.jp/content/000398404.pdf>

大阪府沿岸の累計埋立面積と藻場面積の推移

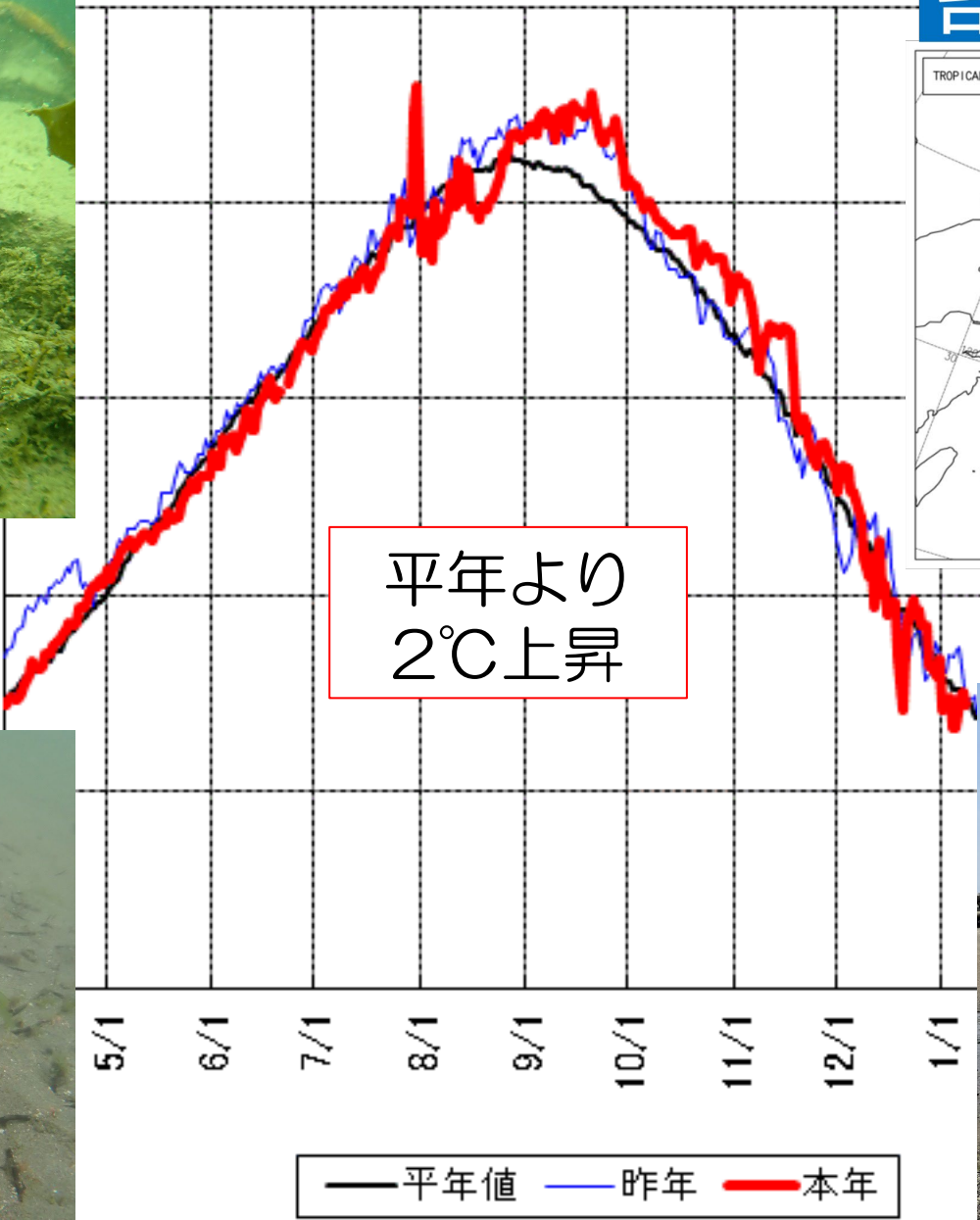
1900年頃～2025年頃 | 埋立の拡大と藻場面積の変化を単純比較



※ 累計埋立面積：1900～1960年頃は港湾・造成史料等を基にした概算を含む。1965年以降は埋立免許・承認面積等を基礎とした長期傾向把握用の概算。

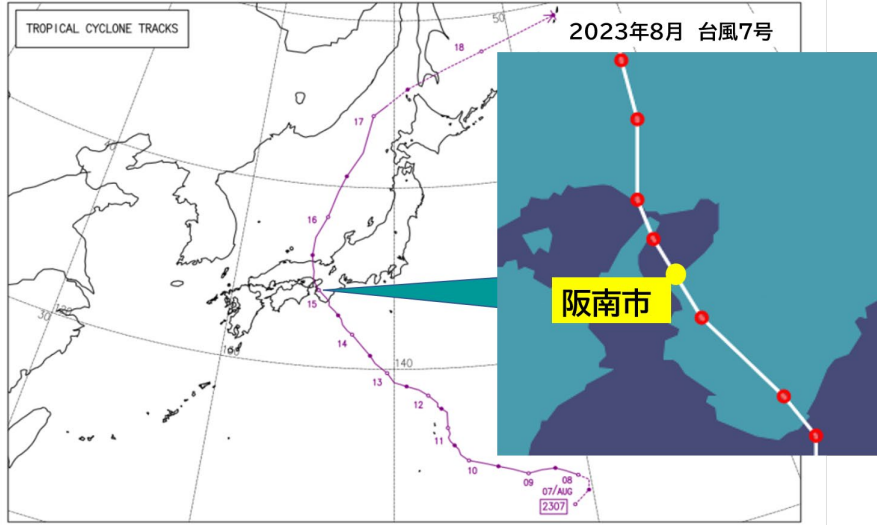
※ 藻場面積：各年代で調査方法・対象・精度等が異なるため、数値の単純比較には留意が必要。

大阪湾の海水温の偏差 (2024年)



平年より
2°C上昇

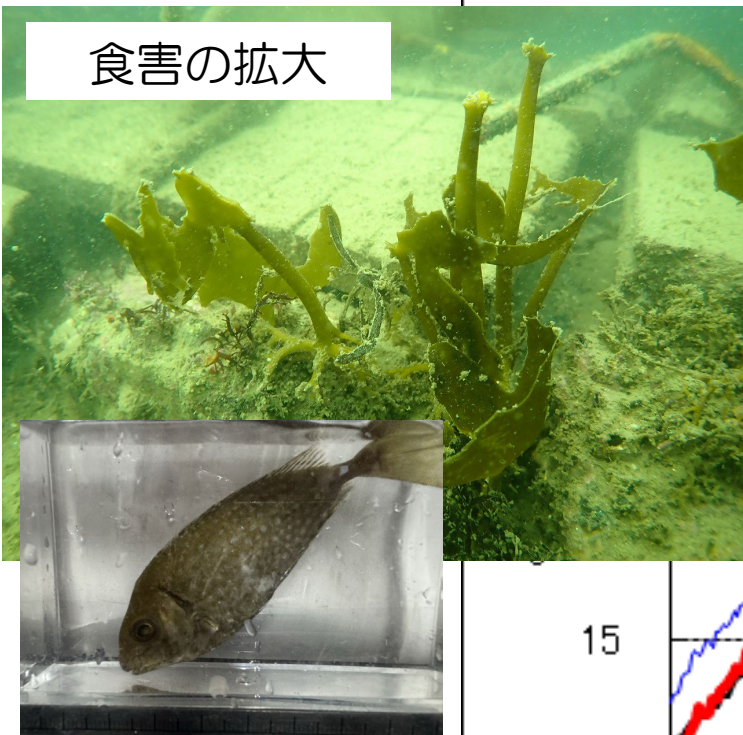
台風によるアマモ場への打撃



台風による土砂堆積



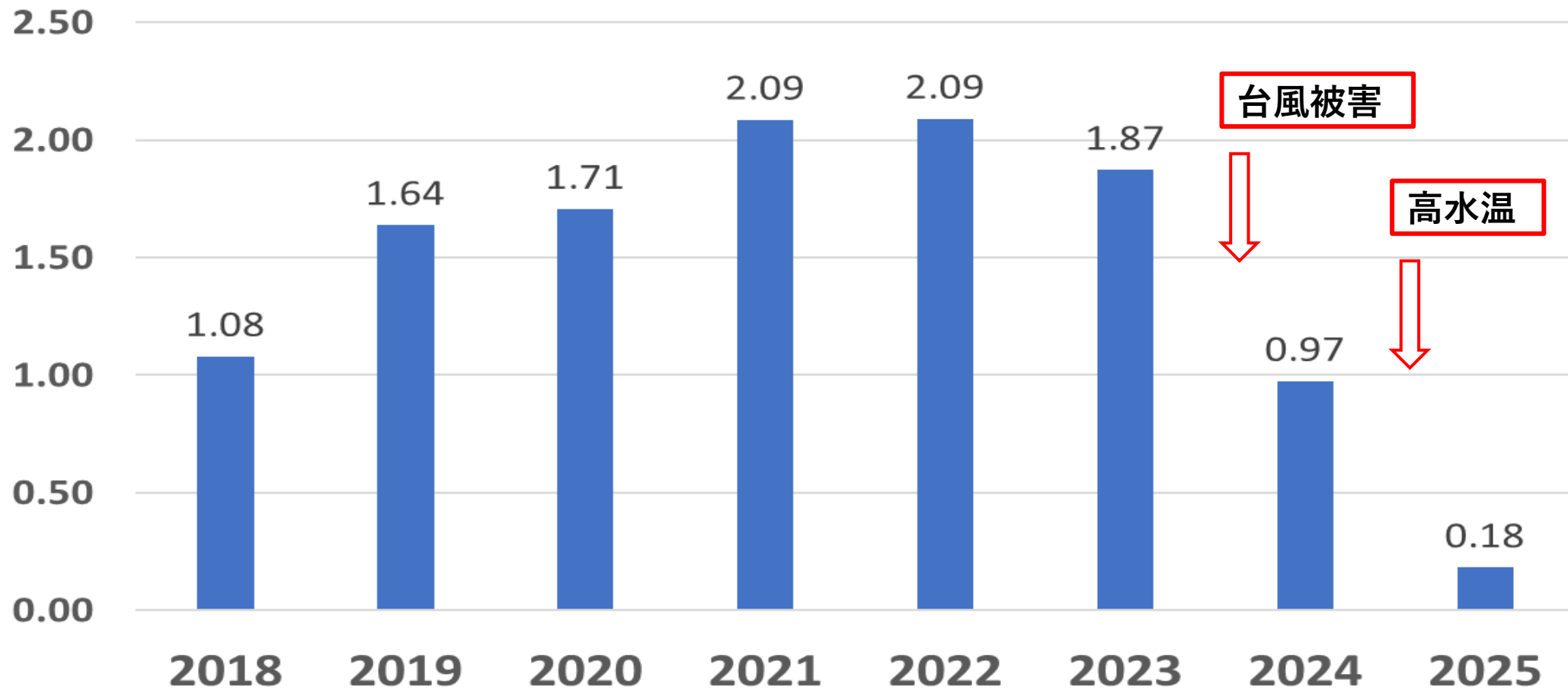
食害の拡大



地中温度上昇 (アマモの根腐れ)



阪南市アマモ場面積の推移 (ha)



土砂堆積による地盤が高くなったことと、高水温（地中の高温）が原因だと考えているが・・・

活動（里海づくり）における3つの観点

良好な海域環境の保全・再生・創出

地域の特性に合わせて「保全」・「再生」・「創出」を行う

⇒特性に合わせた方向性の決定

地域資源の利活用と好循環の形成

持続可能にするために、地域資源の適切な利活用、生態系に着目した観光コンテンツ、ブルーカーボンのクレジット化、企業の参画

⇒人・物・金の確保と活動への還元の好循環

地域の歴史、伝統、文化や自主性を重んじた多様な主体の参加と連携

主体以外の地域住民、事業者、自治体などの協力

⇒地域課題解決と結びつけた連携・協力体制

まずはじめに行っていること

目標の共有：その地域で目指す里海の姿を想像して示す

⇒誰が、どの様な里海（場）で、何をしている（状態）のか？

⇒主役となるステークホルダーは誰なのか？

現実の認識：目標と現実のギャップを明示

⇒目標に対する現状との違いは？

課題の認識：不足しているものを客観的（科学的）に明示

⇒ギャップの原因やギャップを生む理由は？（客観的・科学的根拠）

実力の認識：課題解決のために必要な事、できることやできないことの整理

⇒今できることやギャップを埋めるために必要な事の客観視

解決の道標：解決のプロセス（方法と時間）の整理・明示

⇒客観的（科学的）に検討

⇒今できることの実践計画と今後取り組むべき事項の計画

続けるために行っていること

地域資源の利活用と好循環の形成

持続可能にするために、地域資源の適切な利活用、生態系に着目した観光コンテンツ、ブルーカーボンのクレジット化、企業の参画

⇒地域の何をどうしたら人や企業が興味を持つのか？

⇒資源の保全と利用のバランスや循環するための仕組みは？

地域の歴史、伝統、文化や自主性を重んじた多様な主体の参加と連携

主体以外の地域住民、事業者、自治体などの協力

⇒地域課題解決のためにできること（間接的でOK）

特に複雑な土地利用や管理がある地域では、様々なステークホルダーの協力体制が不可欠

⇒参加者にも地域にもメリットを出す

体験型観光コンテンツの開発 ⇒ 地域資源の活用・地域活性 すだて遊び、カヤック&カキ筏シュノーケリング、カキ殻アートづくり



すだて遊び：非日常空間（参加者）水産資源消費拡大（漁業者）、雇用（地域）

カヤック：非日常空間（参加者）、雇用（地域）

シュノーケリング：非日常空間（参加者）、雇用・観光（地域）

カキ殻WS：オリジナルアート作品（一般市民）、廃棄物アップサイクル（環境）、雇用（地域）

地域観光：コンテンツのプログラム化による新たな観光（地域）

体験型観光コンテンツの開発 ⇒水産資源消費拡大・地域活性

SAP藻場再生、お魚調理教室、イスズミ弁当、水産加工場見学、地域観光



- SAP : 非日常空間（参加者）、雇用（地域）
- お魚教室 : 非日常空間（参加者）、水産資源消費拡大（漁業者）
- イスズミ弁当 : 新たな収入（漁業者）、食害魚駆除（漁業者）、新たな消費（地域）
- 鰹節工場見学 : 非日常空間（参加者）、商品PR（地域）、新たな観光（地域）
- 地域観光 : 観光地PR（地域）、飲食・小売業活性（地域）

wedding cake model

レジリエンス・センター（ストックホルム）
ヨハン・ロックストローム博士らによる提唱
（2016年）



自然が社会や経済を下支え

評価と実現に向けた調整

社会や経済の土台となる**生物多様性は、社会インフラ整備**と同じ

⇒根底が整わない発展は、いつか崩壊する

⇒地域性や局所環境などの特性に合った取り組み

ステークホルダーをつなぐ仲介者の役割が重要

⇒研究者やNPOなどが適任？（活動を通じた成果を得る）

⇒活動者では得られないデータを得るための取り組み（面積や地形など）

小さいことからコツコツと（**持続可能な積み上げ**）

⇒**自然再生活動は長期戦**なので継続できるかが最重要

⇒目立つ活動も必要だが、継続できなければカンフル剤

⇒人・ものは資金より重要な要素。資金に頼ることのない活動のベースを持つ

忖度

相手の気持ちや状況をポジティブに推察し、気遣うこと

今後に期待する事

規制と運用のバランスを図る

- 「地域循環共生圏」「自然共生サイト」「里海づくり」を効果的に機能させる（3者の関係性を明確にし、それぞれの内容を網羅した指針やルールづくり）
- 3者を一体的に推進する地域組織を対象にした運用の検証（評価基準など）

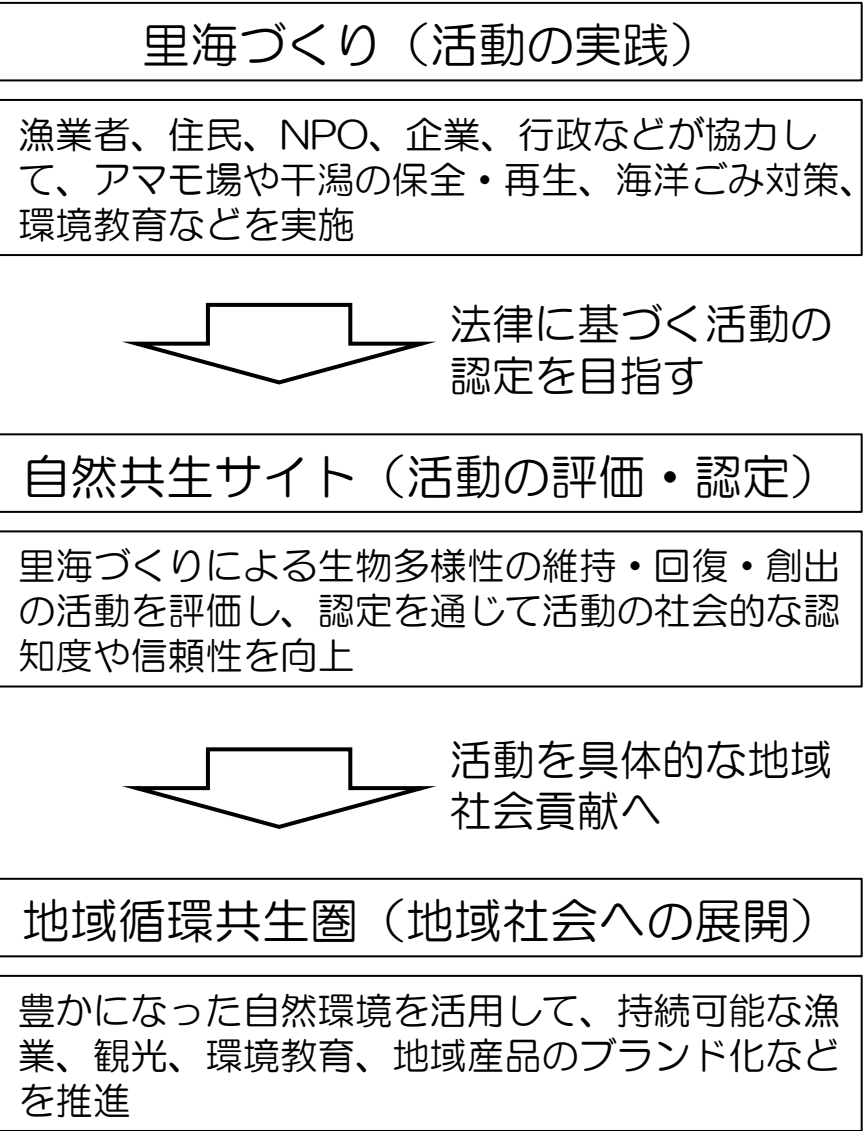
省庁間連携のハブ（Hub）となる

- 各省庁で実施している取り組みとの協働（生物多様性・ブルーカーボン・水産多面的、学校教育、観光など）
- 自然環境の保全と地域経済を結びつけるための働きかけや具体的な施策、特に地方の中小企業でも参画できる仕組み（経済界・経産省）
- 他省庁との連携・協働の可能性を検討（例えば防衛省・経産省・国交省・農水省）

科学的な根拠の支援・提供

- 活動の中で取得できないデータの取得支援とその仕組み（ルール）
- 自然環境の価値の見える化
- 他地域で得られているデータのデータベース化（誰もが利用できる仕組み）
- 専門家やアドバイザー派遣（登録制度・資金なども含めた支援）

3者の関連性と相乗効果のフロー



3者の目的と役割の一覧

項目	地域循環共生圏	自然共生サイト	里海づくり
基本理念	環境・経済・社会の統合的向上	生物多様性の保全・回復・創出	人と海との持続可能な共生
主な目的	持続可能な地域社会の形成	ネイチャーポジティブの実現	豊かな海の再生と地域資源の持続可能な利用
対象範囲	森・里・川・海・都市を含む地域全体	生物多様性の保全等に取り組む特定区域	沿岸域、藻場、干潟、漁村など
主な活動	地域資源の循環、産業振興、脱炭素、地域連携	生物多様性の維持・回復・創出、活動計画の認定	藻場再生、干潟保全、漁業振興、環境教育
期待される効果	地域経済の活性化、雇用創出、地域課題の解決	生物多様性の保全、企業等の参画促進	生物多様性の向上、水産資源の維持、地域文化の継承
位置付け	地域づくりの理念・構想	法律に基づく認定制度	地域主体の実践活動
主な関係者	行政、企業、住民、NPO、大学など	土地・海域の管理者、企業、NPO、自治体など	漁業者、住民、NPO、企業、研究者、行政など

